

そういう状況の中にあつて、三好學のように、生徒に何とか作文への興味、関心を抱かせ、書くことへの意欲を持たせようと工夫を凝らした教師がいたことは注目すべきことである。

今回は、学制頒布後暫くしての明治十年頃の高山、土岐における作文教育関係資料を手にすることができたが、今後は岐阜県の各地域へ広げ、また時代を下がったの資料を見出していくことに努め、岐阜県の作文・綴方教育の歴史を明らかにしていきたい。

## 注

- (1) 「作文」の名称については、明治三十三年の「小學校令施行規則」で、それまでの「作文」が「綴り方」となり、以後昭和二十二年、「学習指導要領」で再び「作文」となった。従って、この間の全体を問題にするときは「作文・綴方」と表記し、明治十年前後の場合は「作文」と表記した。
- (2) この稿で引用した明治十年前後の文章には、変体仮名、草書体文字、異体漢字等が随分使用されている。いわゆる旧漢字ばかりが使われているかと思うと、特に個人の場合、現在一般に使われている略体漢字もしばしば使われている。そのまま引用すると、「ママ」の使用が極めて繁雑になると思う、本稿では変体仮名、草書体文字、異体漢字は、現行のものに改めてあらわす。
- (3) この時期、小学生を指す「児童」という言葉は使われていない。従って本稿では、明治十年前後の小学生を言う場合のみ

「生徒」の表記とした。

- (4) 三好學は土岐小を退職して上京。帝国大学理科大学動植物学科卒。ドイツ留学三年余。東京帝国大学教授、同大理学部附属植物園長、帝国学士院会員、史蹟名勝天然記念物調査委員、日本植物学会会長。昭和十四年没。

- (5) 「課」は「科」。三好の『授業日誌』では、作文課、歴史課、地理課、算術課等、科目名を「課」の文字を使って表記している。

## 参考・引用文献

- ・『作文教育変遷史』川口半平著 岐阜県国語教育研究会 昭和33年11月
- ・『国語教育史資料』第5巻 東京法令 昭和56年4月
- ・『授業日誌』上、下 三好學編 岩村町教育委員会 平成5年10月
- ・『高山市史』第3巻 高山市編 下は 平成8年3月
- ・『頭書類語小学作文五百題』一、二 安井乙熊編 同盟舎 昭和58年8月
- ・『普通教科紀事文題』上 斎藤時泰著 明治11年3月
- ・『小学文題新編』栗田 智城編 江島喜兵衛 明治12年7月
- ・『明治維新実用作文』宇都安明編 水谷善七 明治11年11日
- ・『明治維新実用作文』宇都安明編 いろは書房 明治28年8月
- ・岐阜県歴史資料館、高山市立東小学校記念館所蔵の生徒作文資料

壁ニ上レバ、土皆赭壤、具サニ之ヲ検スレバ、果シテ化石アリ、石、介状ナルアリ、螺形ナルアリ、螺形ノモノ線状ヲナシ、十二圈繞ニ至ルモノアリ、或ハ白色玲瓏タルアリ、或ハ黒色炭ノ如キアリ、得ルトシテ奇ナラザルナシ、稀ニ胡桃石、木葉石ヲ出ス、客ノ曰ク予西遊シテ肥薩ノ山、上古ノ化石ヲ産スルヲ見シガ、多クハ混介石ニシテ、此ノ如ク完キ者アラズ、蓋シ地層ノ質ニヨルモノカ、遂ニ數十ヲ掘リ、喜テ而シテ帰ル、客予ニ文ヲ求ム、乃チ記シテ以テ与フ、客名ハ静脩、山科氏、古堂ト号ス、勢州松坂ノ人、深く地質ノ學ヲ究ミト云フ、

この授業の文話で、三好は、まず松ヶ洞について「土岐村ノ北山洞ナリ山壁ニ古ノ化石ヲ出ス土人之ヲ御下リト称ス蓋シ天ヨリ下リシモノトナスカ仰モ三千年前大洪水ノ際埋没シタルモノナラン」と解説を加え、さらに、「明治十二年七月十八日校生数人ニ誘ハレテ洞ニ至リ實檢シタリ数十個ヲ取得テ帰ル此ノ日胡桃石ヲ得タリ当郡月吉村山高山多ク之ヲ出ス松洞亦其ノ脈勢ノ連ルトコロカ按ズルニ螺形ノ状アルモノハモト外殻消尽シテ中心ニ残リタルモノナラン」と、この記事文を書くに至ったいきさつについても触れている。

話を聞く生徒にとっては、作文書に載っている行ったことも、見たことも、経験したこともないような場所や事柄などについて述べた文章よりも、近くにある松洞の化石のこと、いつも使用している教科書の注文、先日奉迎に出た

主上御通輦の景況、先日済ませた昇級試験のことが文題になり、それについて書かれた三好先生の範文があり、文章を書いた本人から、内容の意味するところ、書くに至ったいきさつ等の話を聞くことができるということは、作文を書く意欲を育て、文章を書く要点、技法等について体得していくこの上ない指導になったことが推測される。

#### むすび

明治十年前後の高山・煥章学校の生徒作文、土岐・土岐小学校の三好學訓導兼校長の授業記録の二つの資料から、当時の岐阜県における作文教育の状況を知る手がかりを得ることができた。

現在の小学校各学年児童が学習する作文の内容と対比しながら、当時の岐阜県の同年齢の小学生徒たちが受けた作文授業の内容を見ると、実用主義、形式主義、範文模倣の画一主義と言われるような作文教育が他の府県と同様岐阜県の場合も、行われていたということが出来る。

生徒たちが学習する作文は、書き手である子どもの生活、気持ち、考えを内容とするのではなく、大人社会の生活で必用とされるもの、実用に役立つものが内容となっていた。それだけに内容はもとより用語、形式等すべてが大人の基準であり、子どもの実生活とはかけ離れた、学力程度の高いものであった。勢い、提示された範文を模倣し、形式を覚え、場と条件に応じた文章を書くことができるようになるのが作文教育の状況であつたわけである。

覧所ノ開設ヲ謀ル文返簡」などを範文として挙げ日用文指導を行っている。作文指導に新聞を利用しようという着想と実践は、三好の教師としての力量の一端を示しているものと言えるであろう。

(六) 範文の創作

授業の際に掲示した数多くの範文を、三好はどのように用意したのだろうか。市販の作文書記載の例文をそのまま使用した場合には、「授業日誌」の本文の中や頭注欄に、「小學第一尺牘」「小學文章」「小學作文五百題」「小學紀事文題」「名家作文五百題」「記事論說文例」などと、きちんと注記している。しかし、特に日用文を中心に、三好自身が文例を創作したり、また各種作文書に当たって適当なものを取捨選択したり、より適切なものにするため内容を改変したりして、「自分の作文授業」により適合する文例を用意したことが推測される。

三好は「授業日誌」の中で、作文参考書として「小學作文類纂」「珍袖一千題」「作文五百題」「当世用文章」「作文必用」「朝野用文」「年中用文章」「日用文」「普通小學用文」「文證大成」「帝國文證大全」並びに「幼稚新聞」「穎才新聞」「文例新聞」を挙げ、次のように述べている。

近世作文書類枚舉スルニ堪エズ然レドモ大同小異完全  
美玉ノモノ少ナシ 五百題及 普通用文章 一千題  
作文類纂等ハ可ナリ余日来授クルトコロノ日用文三百  
題ヲ蒐集シテ最鄙近ヨリシテ民間普通ノモノヲ撰バン  
トス書ナラバ日用文章ト名クベシ (明治12・12・16)

三好は、土岐小学校在任中に、「生理小學」「小學修身讀本」「土岐郡地誌畧」を著して出版しているが、作文教科書についても、この記述からは出版の思いがあったことを窺わせる。また届書を書く授業で

小学日用文章 一冊 著者 某

右此度出版致候間此段御届申上候也

年号 月 日

何府県郡区町村番地住居 華士族平民 何某 印

内務卿 某殿

というような範文を提示していることも、その思いの現れであろう。

三好はまた校務のかたわら、しばしば大山在住の漢学者村瀬太乙を訪ね、漢籍を学んだと言われるが、「授業日誌」に見られる開業・終業の演説、授業での講話、文部卿河野敏鎌への建議文等どれをとっても達意の文章を残している。こうした「自らも書く力を持っている」ことが、三好に作文授業の際の範文を創作させることになるのは必然であろう。日用文はもとよりであるが、記事文等についても、三好の筆になる範文を使つての作文授業が「授業日誌」の中の随所に見られる。その一つを次に挙げてみよう。

松洞ニ遊ブ記

土岐ノ郷、北山ニ古ノ化石ヲ産スルトコロアリ、松ヶ  
洞ト云フ、予其ノ審ヲ檢セント欲シ、乃チ好事ノ客ト  
至リ觀ル、大月ヨリ逕路ニ入レバ、松籟蕭々トシテ、  
泉声石ニ咽ビ、風物蕭瑟トシテ古色幽然タリ、攀テ絶

ス仰モ十二年巳ニ去リ十三年此ニ来ル歲月ノ移ル流木ノ如ク奔馬ノ如シ日月ノ頻リニ往クモ我が學ノ成ラザルヲ如何セン嗟呼本校ハ殊ニ他校ノ模範タルガ如ク教育洽ク布キ生員愈達ス冀クバ此校ノ益々隆盛ニ赴キ年ト共ニ新ヲ加ヘンコトヲ

明治十三年一月十四日

伊藤馨二郎

同

明治庚辰ノ歳一月十四日我校開業ノ式ヲ行ハル我等喜ビニ堪エズ夫人ハ學問ヲ勉メザレバ智識ヲ得ルコトナク智識ヲ得ザレバ富貴トナルコトナシ故ニ今年ヨリ愈勉メテ本校ノ光ヲ顯ハサントス故ニ之ヲ祝ス

明治十三年一月

第二級生

梶田銀女

同

明治十三年一月十四日我校開業式ヲ行フ生等本校ノ生徒タルヲ以テ喜ビ夙ニ入りテ之ヲ祝スソレ人幼少ヨリ學バザレバ愚人トナル生等未ダ幼ナリ故ニ益勉強シテ本校ノ恩ニ答ヘント欲ス

明治十三年一月

第二級生

森本小三郎

祝文の内容は、これまでに挙げてきた生徒の作文と少しも変わることのない印象を与えるものであるが、三好が、新年の始業式のような場にも生徒の作文を位置付け、生徒の作文を書くことへの意欲、関心を高めようとしていることが窺えるのである。

三好はまた、担任する生徒が第一級生に昇級した時点で、生徒たちに「第一級生規則」を示している。その中には、

一 日々受業日誌ヲ作り習業ノ事ヲ記スベシ  
一 時々研究討論會闕文會書會等ヲナスコトアルベシ  
というような、文章を書くことにかかわる内容が示されているが、その他にも授業時間割の土曜日を見ると、餘科の時間に「新聞」が充ててある。『授業日誌』には

第一級生餘科新聞誦覽

或ハ作文ノ一助トナリ或ハ世實ノ事ヲ智リ己レガ見聞ヲ増スモノハコレ新聞雜誌ニアリ故ニ數種ノ新聞ヲ撰シ縦覽セシメテ質問ヲナサシム

教育新聞 曙新聞 文例新聞 日々新聞 朝野新聞

とあつて、作文授業の手がかりを幅広く求めていたことが分かる。三好は第三級生に日用書牘の授業を始めたところから新聞を素材とし、例えば、

東京曙新聞近日の所御覽濟に有之候は、恩借願上候

〔31〕新聞紙ヲ借用スル文

此の讀賣新聞（朝野新聞）近日の分三枚御目に懸け候御覽可被下候

〔91〕新聞紙を廻送する文

今朝東京曙新聞到着致候間夕方御廻申すべく候 草々

〔12〕新聞の到着を報ずる文

を初めとして「新聞ノ遞送ヲ頼ム文」「新聞購求ヲ斷ル文」「新聞紙を廻送さるゝを謝する文」を第三級生で、また第二級生当初に「文例新聞到着ヲ問合スル文」「文例新聞到着ヲ問合セシ返事」「新聞縦覽所ノ開設ヲ謀ル文」「新聞縦

- 三、旅行ヲ知ラセル文  
12・22 一、除夜ノ記 二、歳暮人ニ送ル文  
明治13年

- 1・24 一、元旦ノ記 二、東京大火ノ報ヲ聞テ安  
否ヲ問文 三、年始文  
1・31 一、梅ヲ植ウルノ記 二、外國留學ノ人ニ  
送ル文 三、孝明天皇祭ニ友ヲ招ク文  
2・9 一、雨中楼ニ登ル記 二、書籍店ヲ開キシ  
人ニ送ル文 三、會議ノ日ヲ問合スル文  
3・8 一、煙花ヲ看ルノ記 二、新茶ヲ贈リシヲ  
謝スル文 三、博覽會見物誘引ノ文  
3・22 一、遠州灘ヨリ富士山ヲ望ム記 二、及第  
ノ人ニ送ル文 三、陶器ヲ注文スル文  
3・29 一、汽車ニ乗ル記 二、奈良廻ヲ勸ル文  
三、舟遊ニ誘フ文  
4・12 一、柳塘ニ釣ヲ垂ル、記 二、演說會社ヲ  
設立スル文  
4・19 一、隅田堤ニ桜ヲ賞スル記 二、試験前會  
讀ヲ謀ルノ返事 三、卒業ノ人ニ送ル文  
4・26 一、博覽會ヲ看ル記 二、親類ノ不幸ヲ弔  
スル文 三、宝丹売捌ヲ乞フ文

第十七回宿題のこの日以降、作文宿題について記録があるのは前掲十二月十一日、第二十八回宿題だけで、その間のことは不明である。

作文宿題についての記録がなされている六か月余りは、

三好が担任した生徒が第三級生末から第二級生そして第一級生になった直後までの期間であり、このことはまた、前掲の《表1》と併せて考えてみると、生徒が「実際に作文を書く」ことの多かった期間と重なり、三好が、生徒に作文力を付けるためには、「実際に作文を書く機会をできるだけ多くする必要がある」と考え、「作文を書く意識と技能と慣れを育てるためには、学校と家庭、家庭と学校を連続させねばならない」と考えて実践に取り組んだことを推測させるものである。

#### (五) 学校行事等における作文の意識化

明治十三年一月十四日の開校始業式では、三好による年始開校ノ演說の後で、生徒八名(上等温習生三名、第二級生五名)による生徒祝文朗讀が行われている。『授業日誌』の中に記録されている生徒の実際の作文は、このときの祝文が唯一のものである。

#### 新年開校ノ祝詞

古語ニ曰ク光陰者如駟馬ト實ニ然リ地球已ニ太陽ヲ一旋シ庚辰ノ歳トナレリ四海波靜カニシテ万條鳴ラズ茲ニ本日開業ノ式ヲ行フ我輩亦此ノ席末ニ列スルコトヲ得タリ依テ冀クハ愈益本校ノ隆盛ニシテ教育ノ洽ネカラントコトヲ我輩亦何ンゾ龜勉奮發セザルベケンヤ

明治十三年一月 上等温習生 鵜飼虎藏

同

爰ニ我校新年ノ開業式ヲ行ハル予モ亦席末ニ列スルノ榮ヲ得タルヲ以テ聊カ鄙言ヲ吐露シ以テ之ヲ祝セント

右全ク了リテ會ヲ散ジ各生各席ノ優劣ヲ判ス之ヲ判定スルニ書面ノ程裁行文ノ法方作成ノ遲速等ヲ斟酌シテ點ヲ与フルモノトス

判點 甲九點 同下七點半 乙六點 丙三點

左		左		左		左右 番号
三		二		一		往復
復	往	復	往	復	往	往復
甲上	甲	丙	乙	甲下	乙	判第
16	5	9		13	5	判点
1		5		3		多点
森本		市岡		梶田		人名
右		右		右		左右 番号
三		二		一		往復
復	往	復	往	復	往	往復
乙	甲	丙	甲	乙	乙	判第
15		12		12		判点
2		4		4		多点
福岡		渡辺		小倉		人名

右ノ表ヲ作リテ之ヲ檢スルニ左右得点相匹如ス爰ニ於  
テ作成ノ遅速ヲ以テ之ヲ判ゼント欲ス即チ之ヲ檢スル  
ニ往復トモ右席生先ズ成リテ左席生常ニ遅クル、ヲ以  
テ今右席ヲ以テ甲ノ上トシ左席ヲ甲ノ下トス 以上

《表1》に挙げたように、三好は第三級生を担任して四か月を経た十月半ばから、生徒に作文の宿題を出し始めた。『授業日誌』の頭注には「宿題ハ第一第二ト順ヲ追テ永ク作ルナリ月曜ニ出シテ金曜ニ収メ金曜ニ出シテ月曜ニ収ム

ルナリ」としている。第壹作文宿題は、第一級生に「新聞廻覧ヲ謀ル文」を、第三級生には「夜學會ヲ謀ルノ文」をそれぞれ課題として出している。第二回は、それぞれ前回の「返事」を宿題としている。

十一月末の第三回からは、対象を第一教場（筆者注・上等温習生）第二教場（同・第二級生）・第三教場（同・第三級生）とし、宿題揭示を次のようにしている。

第一 書画會ノ景況ヲ記ス 第一第二教場

第二 昇官ヲ賀スル文

第三 寫眞ヲ送ル文 第三教場

第二級生が記事文を学ぶようになってきたので、生徒に自分の意志で記事文、書簡文のどちらかを選ばせようとしたのであろう。このようにして一年余、『授業日誌』に最後の宿題記録が出てくるのは、第二十八作文宿題「第一風俗ヲ淳良ナラシムルハ教育ヲ盛大ニスルニアルノ論」が作例と共に注記してある明治十三年十二月十一日である。以下、第五回以降の記録されている宿題を挙げると次のようである。

明治  
12年

12・1  
一、秋山鳥ヲ網スルノ記  
二、東京ノ景況

ヲ問合スル文 三、貨物ノ返却ヲ催促ス

ル文

12・9 一、菅公ノ像二題 二、筆ヲ送ル文

三、新聞ヲ惠マレシヲ謝スル文

12・15 一、豊年祭ノ記 二、冬夜客ヲ招文

し、行ってきたものを整理し、まとめたものであることが分かる。三好としては、このようにして作文についての意識を一層高めようと考えたのであろう。

### (三) 作文講習会(闘文会)

三好が第二級生で行ったこの作文講習会についての記録が『授業日誌』に見えるのは、明治十三年一月十七日土曜日、授業時間割にはない特設の時間である。この会について三好は次のように説明している。

講習會ハ相研究スルノ謂ナリ例セバ茲ニ甲校ノ生徒ト乙校ノ生徒ト學藝ヲ講シテ優劣ヲ試ムルナリ則チ各校ノ同級生ヲ會同シ一人ツ、左右相對シ中央ニ會頭アリ各ノ發言ヲ取次ナリ學科ハ問答作文ノ二科ヲ以テ主トス(中略)作文ハ互ニ往復ヲナサシメ各ヨリ必往文復文ヲナサシムルモノトス今仮リニ当校内第二級生ヲ以テ之ノ試ミ分ツテ左右ニ席トシ每席三人ヲ列シ左右相匹敵シ一人ゴトノ優劣ヲ判シテ後ニ兩席ノ優劣ヲ判ツモノトス

この日の作文講習会の具体的なやり方、その結果について、三好はそれまでになかったような詳しい書き方で、次のように説明している。新しく講習会を試みることにについて、それだけの思い入れがあったのであろう。

左席往文 寒中見舞の文  
右席復文 右返事  
右席往文 早春海苔ヲ送ル文  
左席復文 右返事

席順ハ教場ノ順序ヲ以テ一番生ハ左一番ノ席ニ着キ二番生ハ右二番ノ席ニ着キ三番生ハ左二番四番生ハ右二番ト追テ此ノ如クス

左席一番 梶田(女) 右席一番 小倉  
左席二番 市岡 右席二番 渡辺  
左席三番 森本 右席三番 福岡

### 計 九人

作成順序

左席往文 右席往文

1 右席三番 2 右席一番  
3 左席二番 4 左席三番  
5 左席一番 6 右席二番

右了リテ左席一番右席一番ヨリノ文ヲ朗讀シ次ニ右席一番左席一番ヨリノ文ヲ朗讀シ追テ如此ス(此際讀難キ字アレバ其ノ席ノ餘番ニ讀マシメ猶讀ミガタキトキハ會頭之ヲ檢シテ其ノ果シテ誤字ナルヤヲ判ス且作文ナルトキハ會頭之ヲ取次テ右席ヨリ左席或ハ左席ヨリ右席ニ轉換セシム且各席文先ツ作ルトキハ左席ナラバ左席一番或ハ何番ト呼バシメ書記生之ヲ取次グモノトス)

作成順序

左席復文 右席復文

1 右席三番 2 左席一番  
3 左席三番 4 右席一番  
5 右席二番 6 左席二番

「初学ノ文章ハ放膽豪蕩意筆ニ任セテ出デシムベシ然レドモ之ヲ整フルニ法ヲ以テシ之ヲ綴ルニ則ヲ以テス而シテ始メテ文タルベシ」(「東京皇城ノ記」)、「文ヲ作ルニ法則ト骨組トニ熟スルトキハ種々ノ法ヲ記憶シテ活用渾化シ不羈井然タルモノトナラン」(「地図ノ記」)などはその一例である。

## (二) 作文規則

明治十三年三月末、三好は、第二級を間もなく終わろうとする生徒たちに、「作文ノ便益ヲ謀」ることを目的として次の二十項目を示している。

(第一) 文ハ意ヲ属スル最必要ノモノナリ其ノ規則左ノ如シ

(第二) 文書ヲ講シ或ハ讀テ其法則ヲ學ブ

(第三) 自ラ作り意ヲ属ス

(第四) 文ニ日用書簡、願、届、証文、受取、口上、尺牘、記、説、論、辨、序、跋、題、銘、賛、頌、アリ

(第五) 題ニ即題ト宿題トアリ

(第六) 即題ハ教場ニ於テ作ルヲ云フ

(第七) 宿題ハ一日以上或ハ一週毎ニ作ルヲ云フ

(第八) 宿題ハ優劣ヲ判シテ揭示ス

(第九) 闕文會ヲ立テ各生ノ文ヲ闕ハス其ノ題ハ即就或ハ宿就ニシテ其ノ優劣ヲ判ス

(第十) 闕文會ノ作文ハ編輯シテ文集トス

(第十一) 毎月内ニ作ル所ノ文ノ秀拔ナルモノヲ撰テ

## 月集ヲ作ル

(第十二) 毎月作ル所ノ文ヲ算シ年末總計ヲナル内甲乙丙ノ等ニ分チ其ノ優劣ヲ檢ス

(第十三) 全ク竊文ニ係リ或ハ前後ノ文句ヲ変換スルモノ等ハ校正セズモシ後ニ発見スルトキハ以来ノ校正ヲ禁ズ

(第十四) 時ニヨリ口占文ヲ作スコトアリ

(第十五) 文評ハ重圓◎ヲ以テ優等ノ甲トシ○○、○、○、ヲ甲トシ半円○三点、〃、二点、〃、乙トシ一点、ヲ丙トス丁ヲ格外トシ斜交線×ヲ記ス題意ニ反スルモノハ点セズ

(第十六) 評点ハ重圓◎◎◎◎ヲ極妙ノ所ヘ施シ明星点○○○○ヲ妙所ヘ施シ小星点、〃、〃、〃、佳所ニ点シ主眼ノ所ハ縦線ヲ劃ス

(第十七) 段落ハ半角」ヲ大段落トシ四半角」ヲ中段落トシ横線一ヲ小段落トシ括弧( )ヲ挿句トス

(第十八) 法ニ合ヘルノ文ハ一々詳語段落ヲ下スベシ

(第十九) 即題宿題闕文會ニ於テ格別優等ノ者ハ姓名ヲ掲出シテ褒賞スルモノトス

(第二十) 右規則ニ從ヒ候事

明治十三年三月廿九日 作文課

規則の各項目は、基本的な考え方から評価の具体的な方法まで、かなり幅の広いものになっているが、『授業日誌』を読んでみると、それらは、この時点で生徒たちに新しく提出されたものではなく、この時まで折りこまれて指導



録あるいは指導案のようなものは、『授業日誌』に書かれていない。しかし、具体的授業あるいは指導法を推測させるものを幾つか、『授業日誌』の中から挙げてみたい。

(一) 文話

三好は、作文授業において教師が提示した例文をただ書き写して覚えるとか、それを模倣して作文を書くというだけにならないで、範文にかかわる文話を行っている。例えば、第三級生を担当した七月、「年魚ヲ贈ル文」として「木曾川鮎二尾到来ニ任セ進物仕候」を扱った時に「鮎ノ名アル我が美濃ニ於テハ長良川アリ川岐阜ノ傍ヲ流ル毎夜鵜ヲ用ヒテ魚ヲ取ラシム之ヲ鵜飼ト云フ」というような話をしてゐる。頭注に「年魚、香魚、細鱗、鮎、皆アユナリ」としてあるので、恐らく、こうした別表記についての話も行われたのであろう。

また第二級生で、一月「寒梅ヲ看ニ誘フ文」として「本年は時候の模様候か所々の梅花早咲の由殊其梅莊は一両日真盛の赴申越候間明日にも遊覧致度寒風は随分酒力にて可被防吾兄御同行に於ては本懐不過之候 不尽」の授業では、「題寒ヲ以テスル故能ク此ニ注意シ寒中ノ句ヲ用フベシ則チ寒風モ酒力ニテ可被防ノ句コレナリ若シ此ノ句ナキトキハ題意ニ背クベシ」と、題意及びそれに添った語句使用の大切さについて注意を促している。

第一級生まで作文授業の中心になってきた書牘についても、『小學作文五百題 二』の四季用文を扱った五月半ばに、書簡文の意味、書く際の文体についての留意点を次のよう

に話している。

文ハ事ニヨツテ変ズルモノニシテ簡牘ハ意ノ通ズルヲ主トナス故ニ風流雅致ナル字ヲ用フルモ艱澁贅牙ナル句ヲ用フルモ其ノ意情彼レニ通ゼザレバ用ナキノミ故ニ其ノ秘訣トスルトコロハ簡易ニシテ平穩ナルベシ而シテ文ハ与フル人ノ度ニヨツテ変スベシ平人ニ高雅ノ文ヲ与フルモ讀ムベカラズ學者ニ俗文ヲ致スモ中ラザル如ク宜シク其ノ人ノ如何ヲ察シテ文体ノ如何ヲ考フベシ本書書簡文(五百題)ノ如キハ雅俗適合シテ通ジ易シ子等ソレ之等ヲ以テ則トセヨ

また電信用文についても、「電信ハ彼我ノ間至急ヲ要スル時ニ通ズルモノニテ其音信ハ通常尺牘ト異ニシテ極メテ簡約ナルヲ主トス其地方ニ応ジ不用ナルモノト雖ドモ簡文ヲ作ルノ助ケテナルベク且本書(五百題)ニ記載アレバ其作例ヲ學習スベシ」として、「安着ヲ報ズル文」の「イツカゴゼン ハチジ ブジ コウベニ チャクス」を指導している。

この文話は、第一級生になって授業内容に記事文が入るようになると、使用語句の解説、文法、書き振り、構成、鑑賞等その内容が多彩になり、それらについての三好自身の考え、意見をほとんど毎回述べるようになってゐる。

「右ノ文ノ如キハ最モ寛事ヲ記スルモノナリ而シテ其ノ格森嚴トシテ合フヲ以テ明瞭ナリ凡ソ文ヲ作ルニハ此ノ如ク法則ヲ正シクシ段落ヲ嚴ニセバ井然トシテ見ツベシ徒ラニ冗長ノ文ヲ綴ルハ笑フベキノミ」(『浅草ノ公園ニ遊ブ記』、

過日試験の節は僥倖にて及第仕候処厚く御賞詞に預り  
忝なく□感に堪えず候（「右返簡」）

のような書簡の練習をするようになっていたのである。

第二級では、第三級から引き続いて日用文の授業が中心となつてゐるが、《第1》に例示した「作文五百題ヲ取り寄スル文」のような内容・形式で授業が始められていることから分かるように、さらに程度が高くなり、第二級卒業試験を受ける頃には、

短牘令寄送候翠色撲眉の候賢弟益御佳安欣賀／＼小子無障御放意可被下候陳ば文化盛大の時節に際し講字の道隆興致候へば一層御精勵相成後來身名を顕すこと第一の急務と致し此旨無御油斷御切磋学業御成就の程刮望罷在候御尊親様御異、状無之候や御養護奉祈候 布白  
（家弟ノ勉學ヲ励マス文）

を書くような授業を受けるまでになっている。

また、この級の後半からは、

#### 旅行届

私儀何府縣下へ來何日ヨリ凡一月間旅行候間此段御届申上候也

年 月 日 區番地住 姓 名 印  
戸 長 御 中

のような、いわゆる日用書類の授業や、記（紀）事文の授業も加わつてきている。記事文の最初の授業で取り上げられた「地図ノ記」は、次のような文章である。

茫々タル地球、之ヲ分チテ五洲トス、曰亜細亞、曰歐

羅巴、曰亜非利加、曰亜米利加、曰澳太利亜、万里ノ廣キ、収縮シテ方尺ノ紙ニ画ク、地圖是ナリ、之ヲ開ケバ、蜿蜒タル山、滔々タル河、首府、海港、島嶼ニ至ル迄、一トシテ挙ゲザルハナシ、東京ハ北京ト相望ミ、龍動ハ巴里ト相對ス、足ナクシテ千里ヲ歩シ、坐ナカラニシテ万里ヲ望ム、ソレ用モ亦大ナル哉、

このように、第二級生で日用文、届書、記事文の三種類の書き方を生徒が学ぶことができるように、三好は作文授業を仕組んでいる。

下等小学最上級の第一級生になると、日用文の授業は、記事文、日用書類に比べれば多いが、第三級、第二級の時に比べるとその数はぐんと減つてゐる。代わつて「記事文題」を使つての輪読、講義が、作文授業の半ばを占めるようになってくる。上等八級（上等二級）、上等一級の作文授業の内容をも併せて見てみると、三好の作文授業の場合には、この第一級のところで、日用文から記事、論説文中心の指導への移行が図られていることが分かる。また、文題とそれの具体的な範文を最初に示し、それに従つて授業を行うのではなく、文題だけを示して作文を書かせる「教場即題」が、かなりの時間出てきているのも特徴として捉えられる。

#### 三好 學の行つた作文指導

三好が《表1》に挙げたような文題及び例文を使つて、どのように一時間の授業を展開したのか、具体的な授業記

12 ・ 25	12 ・ 22
上 等 第 1 級 生	
卒業試験 13年度 終業式	
37	
<p>ノ説、論説（文章課）</p> <p>（一）都人風流ノ論（『小學紀事文下』による講義） 教育奨励ノ論・文章當世ニ震フ論・華盛頓ノ論・ 那烈爾ノ論・豐太閣ノ論・電信氣ノ論・書生郷関 ヲ出ツルノ論・蘇東坡ノ論・駱駝ノ論・慧星ノ論・ 捕鯨ノ論・楠木ノ説・日本刀ノ説・萬里長城ノ 説・光陰惜ムベキノ説・共同和親ノ説、 など教場即題一、論説文一三、『紀事文題 下』 論説文講義八六</p>	

三好は、担任としてまた校長として、授業を行うに当たつての基本を「……仰モ本校轄内一般ノ風土ニシテ必要ナルモノトテハ讀書、珠算、日用文、習字ノ四科ニ如クモノナカルベシ、故ニ此ノ四學科ハ最第一ニ勉勵スベキモノナリ」（『終業ノ演説』明治12・12・24）と考えている。作文は授業科目の中の大事な柱であり、殊に日用文の学習を重視しようとしていることが分かる。

このことはまず、三好が行った作文授業の時間数から言うことができる。

「小學教則改正」（明治六年）には、第三級が書牘一週一時、第二級が書牘一週二時、第一級が書牘一週四時となっているが、『授業日誌』を見ると、三好は、第三級を担任した最初から一週四く五時間を作文の授業に充ててお

り、さらに第二級でも同じように作文の時間を取っている。三好に担任された生徒たちは、第三級から第一級までの間に、小學教則に示された倍近くの作文の授業をうけているわけである。

また作文授業の内容について見ると、『表1』からも分かるように、第三級では、まず書牘の要字、要語の指導から入り、次いで『表1』に例示した「年始ノ文」「入學ヲ賀スル文」「書籍ヲ贈ル文」のような簡略な日用文から、次第に社会生活のいろいろな分野を文題として、やや長めの日用文を書く指導へと段階を進めている。この級の終わり頃の、現在で言えば小学校三年生中頃の生徒が、

昨日は卒業試験御及第被成奉大賀候全く平常御勉勵の段と感賞仕候（試験及第を賀する文）

明治 13 年				
10 ・ 18	10 ・ 13	8 ・ 28	7 ・ 29	7 ・ 27
	上等第 8 級生（上等第 2 級生）		下 等 第 1 級 生	
	卒業試験	月次試験	卒業試験	
下 小學紀事文題		記事論説文例	上 小學紀事文題	
	39		69	
教場即題 論説（作文課） 勉ムレバ功アル説・幼ニシテ学ブベキ説・夜學ノ 説、寒菊ノ説・玉琢カザレバ器ヲ成サザル説・雪	文講義九〇 など記事文七、教場即題一二、『紀事文題』紀事 事ヲ記ス（一二五）東京名園ノ記 『小額記事文題』輪読・講義（四五）北上川ノ 事ヲ記ス 教場即題 ヲ記ス・孟蘭盆會ノ事ヲ記ス、 氷ヲ買フノ記・墨田川ノ記・横浜の記・七夕ノ事 切眞ニ扶桑ノ名山ナル哉 氣ノ集ルトコロ玲瓏タル白玉突兀五千 （二五）富士山ノ記 八朶ノ芙蓉九天ニ聳ヘ千秋靈		角御攝護□□御出院の程奉待候葡萄 糖一壺任幸便拝進仕候 不啓 新迎ノ賀文・某教員ノ職ヲ辭シテ郷ニ帰ルヲ送ル 文、銀行入社ヲ勸ムル文・龍駕巡行ヲ祝スル文・ 遠国友人ノ安否ヲ問フ文・蟲害驅除法ヲ尋ル文・ 蛭狩ニ誘フ文・初夏胡瓜ヲ贈ル文・主上御通聲ノ 景況ヲ報ズル文、 水亭ニ會スル記・雨中山ヲ看ル記・躑躅花ヲ看ル 記・養老瀧ニ遊ブ記・初夏山居ノ記・牡丹ヲ賞ス ル記・夏夕立ヲ喜ブノ記 寄留届・改印届・遺失物見届 教場即題 『小學紀事文題 上』輪読・講義（一）東京皇城 ノ記（四四）武蔵野原ノ記 など、日用文二二、記事文八、届書三、教場即題 一一、『紀事文題』紀事文輪読・講義四四	
作文授業内容、使用教 科書の見通し説明 作文宿題の提出、評価 その解説。	作文授業内容、使用教 科書の見通し説明 作文課と文章課を分け る。 （土岐小學教則改正二よ り上等八級改め上等二 級生 八月三十日）		作文宿題の提出、評価	

明治十年頃の岐阜県における小学校作文教育の一実態

10 ・ 22	11 ・ 29	12 ・ 23	1 ・ 29	2 ・ 28	3 ・ 31	4 ・ 15	4 ・ 16	5 ・ 28
下 等 第 2 級 生								
月次試験	月次試験	月次試験	月次試験	月次試験	月次試験	卒業試験	月次試験	月次試験
小學作文五百 題一							小學作文五百 題二	
102								
(二二五) 作文五百題ヲ取寄スル文 時下秋冷ノ候 益御盛榮奉賀候然ハ東京同盟詞舎出 版ノ小学作文五百題ノ十部入用ニ付 至急御回送方御願申入候也尤モ製本 ノ義ハ御吟味可被下候 病氣全快ヲ賀スル文・帶地ヲ取寄スル文・他国ヨ リ帰リシ人ニ送ル文・湯治ヲ誘フ文・僧ヲ招ク文・ 麻疹見舞ノ文・紀州蜜柑ヲ取寄スル文・善光寺参 詣ヲ誘フ文―善光寺参詣誘引ノ文返事・新聞縦覧 所ノ開設ヲ謀ル文―新聞縦覧所ノ開設ヲ謀ル文返 事・書物ノ編輯ヲ囑スル文―書物ノ編輯ヲ囑セラ レタルノ返事・旅中家ニ送ル文―旅中家ニ送ル文 返事・死去ヲ知ラセル文―死去ヲ弔フ文―同返事、 日用書類 旅行届・帰宅届・不参加届・死亡届・出張届・留 学届・改業届・養子届・出版届、 記(紀) 事文 地図ノ記・試筆ノ記・蘭ヲ買フノ記・春夜琴ヲ聞 クノ記・日曜散歩ノ記・亀井戸天神ニ詣スル記・ 天ノ橋立ニ遊ブ記・琵琶湖ニ遊ブ記・吉野山ニ櫻 花ヲ觀ル記・富士山ニ登ル記・晴耕雨讀ノ記、 米寿ヲ賀スル文・砂糖漬ノ製法ヲ問フ文・人ヲ官 ニ進ムル文・洋學入門ヲ乞フ文・自著ノ書籍ヲ贈 ル文など 日用文一一一、届書一三、記事文二三	(二三七) 病院ニ在ル人ニ送ル文 雙鯉肅送仕候玄 鳥已に至の候尊体御近状如何漸く御 快復被為成候也世塵に取紛れ久く御 書問不仕緩慢の段御有免可被下候御 入院後早半期にも相成久敷御療養定 めて御倦懶の事と奉察候何分にも折							
十三年一月末より、届 書、紀事文の授業開始。 文話―例文語句の意味、 作文上の留意点、鑑賞。 『小學作文五百題』の輪 読、講義。 作文講習会(關文会) 作文規則二〇条 新年始業式での生徒に よる祝文朗読 作文宿題の提出、評価 その解説。	作文授業内容、使用教 科書の見通し説明 新聞誦読(餘科)							

〈表1〉 三好學訓導兼校長の作文授業の概要

明治 12 年				年
10 ・ 20	9 ・ 30	7 ・ 14	6 ・ 5	月日
下 等 第 3 級 生				学級
昇級試験	月次試験			試験
		小学文章	小学第一尺牘	作文教科書
59		8		時間
<p>日用書牘</p> <p>(1) 年始ノ文 新年の御慶目出度爲候</p> <p>(2) 入學ヲ賀スル文 今般御入學相成候由奉賀候</p> <p>(3) 書籍ヲ贈ル文 小學入門一冊差上申候</p> <p>授業時間ヲ問フ文・遊歩ニ誘フ文・書物ヲ借用スル文・友人ト會讀ヲ約スル文・衣服ノ裁縫ヲ頼ム文</p> <p>書物ノ値段ヲ問フ文・法事ニ客ヲ招ク文・新聞ノ通送ヲ頼ム文・相場問合之文・金子ヲ借用スル文・小飲ニ友人ヲ招ク文・蓮飯ヲ饗應スル文・花菖蒲遊覧ニ誘フ文・醫者ヲ頼ム文・友人ノ昇級ヲ賀スル文・轉宅ヲ報ズル文・氷店開業廣告・競馬興業ノ口上・家釀ヲ贈ラレシニ謝スル文・出産ヲ賀スル文・古物ノ目利ヲ頼ム文など 日用文一二四</p>		<p>要字 候・候に付・候はゞ・被下・可被下候・仕度 奉存候・乍憚・有之・仰有通・依而・兼而・扱 何卒・難有など 八一</p> <p>要語 一筆啓上・寸楮捧上・何日付の御状拝見・貴墨捧読・餘寒の候・暖和の砌・御暮被成・御清祥・日出度存候・拙宅・無恙・御休神可被下候 恐惶謹言・早々頓首など 七二</p> <p>要語淵数 (文頭往詞) 一簡・一翰、奉呈・謹呈、(文頭復詞) 尊簡・玉章・被見・拝読、(遠所ヨリ来翰) 何月何日付ノ貴翰今日到着早速拝見仕候、(時候之部) 寒氣相募候處・春寒之時節 落花之時節・酷暑之候・秋冷之砌・三冬夜學之時節、(結語) (結尾略詞) (尊称) (傍書) など 五六〇</p>		内 容
10・13より作文宿題		<p>作文初歩は要字↓要語 ↓行文。要字・要語は 成るべく行草で記す。</p> <p>書き取り、略解。</p> <p>前章挙ぐる所は其の一 例。此に数多の例を纂 めて属文の変用に供す。</p>		指導等

此冊子ハ余ガ擔當教場ノ授業ノ日誌ニシテ筆ヲ十二年六月一日ニ起シ以テ十三年十二月二十五日ニ終ル其間日ニ教授スル所ノ者悉ク登載セザルハナシ而シテ本誌ノ要授業ノ學科ヲ記録スルニ在リト雖モ間ニ亦一二ノ理論ヲモ録スルモノアリ

此ノ冊筆ヲ勿々ノ間ニ執ルヲ以テ誤脱頗ル多ク記体モ亦精シカラズ而シテ日録怠ラズ冊々積テ堆ヲ爲ス則茲ニ装綴シ以テ机右ノ便覽ニ供フト云フ

明治十四年第一月一日岐阜縣美濃国土岐郡土岐村  
公立土岐小學校ニ於テ

五等訓導 三好 學 識

『授業日誌』は、上部に頭注用の欄のある罫紙に、筆で几帳面に書かれたもので、授業についての記録の仕方は、日付、曜日、級、科目、内容等ほぼ一定している。明治十二年八月二日の記録を一例として挙げると次のようである。

二日土曜日

第三級生算術課（筆者注・問題上欄に「数学」千題の頭注あり）

（1）油一升ノ價二十一錢六厘ニシテ毎十二燈ニテ五合ヲ費ヤセリ每一燈幾何ヲ費ヤスヤ

答九厘

（2）絹ヲ織ルコト毎時二尺三寸五分ニシテ毎日十一

時ツ、廿八日ニシテ織ルコト幾何

答七十二丈八尺

同作文課<sup>5)</sup>

（49）天長節二人ヲ招ク文

本日は天長節の佳辰に付聊祝杯献度御閑隙に有之候は、御入来可被下候 早々

第一土曜日脩身口授第三回

孝行 （伊勢孝子萬吉）

茲ニ説出ス、孝子萬吉ハ、伊勢国鈴鹿嶺ノ人ニシテ、父ヲ市右衛門ト云ヒ、母ヲ久米ト云フ、……

（筆者注・この説話は、以下六ページにわたって書かれている。

上欄初めに「近世孝子傳 此談孝行最モ殊勝タリ因テ今孝子傳ノ文ヲ悉録ス……」の頭注あり。また、上欄途中に「予説テ茲ニ到ル毎ニ歎歎シテ言ヲ得ズ」「此日此談ヲ聞クモノ皆涙ヲ墮サ、ルハナカリシ予モ亦殆ト堪エザルニ至ル」の書き込みあり）この『授業日誌』の中から、作文にかかわる記述を取り出し、明治十年初めにおける一教師の実践の跡を見てみたい。

### 『授業日誌』に見る作文指導の全体

まず、一年半にわたる三好の作文授業を『授業日誌』によって概観すると、次表のようになる。

両三友ト結束シテ北ニ趣ク行ク七八町宮川ノ下流水漲  
リ一艘ノ小舸ヲ浮ブ故ニ乗ジ共ニ四ヲ廻転スルニ河岸  
ニ一ノ燕子花アリ涼風吹來テ馥ヲ送ル時ニ初秋楓樹両  
岸ニ林立シ一輪ノ明月其間ニ出テ銀光沈々タリ空中ヲ  
飛翺スル杜鵑ハ波濤ニ映ジ恰モ倒ニタオルガ如ク川中  
ニ僭ム諸魚ハ照明ニ（以下不明）

東小学校に残されているもう一種類の作文は、書かれた年月は不明であるが、「下等第四級生」と表記されていることから、おそらく明治十年前後に書かれたものであろう。また欄外に「乙ノ下」「乙ノ中」といった評定が記入されていることから、月次試験とか昇級試験とかにおいて、「櫻」の課題で書かれた作文ではないかと推測される。

櫻ハ喬木ノ一ニシテ三月頃花開キ是ハ大和吉野山又ハ常陸ノ隅田川向山ニ多ク生シ其花色ハ薄江ニシテ人家ノ庭園等ニ植其風景甚美麗ナリ

#### 第四級生 田中ふさ子

櫻ハ花卉中ノ上等二位ス三月頃花開キ其開クヤ梅ニ後レテ杏桃ニ先ツ此ノ花ノ名所ハ山城ノ嵐山又大和ノ吉野山等ヲ名所トス近ク是レヲ怠スレバ雪ハ衣ニ怠ズ遠ク是ヲ見レバ草木ニ雪ナトノ「フリ」タルガ如シ此花ハ日本第壹ノ名花ナリ

#### 下等第四級生 西田荒太郎是ヲ書

第四級生は今の小学校三年生半ばであることから考えると、先に引用した第一級生、上等第七級生の作文を読んだ時と同じ印象の内容であり表現である。では、このような

日用文、紀事文等を書く生徒が、どのような指導の中から生まれてきたのか、その当時の教師の指導の状況について見てみたい。

#### 三好學と「授業日誌」

岐阜県図書館には、郷土に輝く先人の業績を称え、顕彰する特別資料室が設けられている。そこには、坪内逍遙、津田左右吉、高木貞次、前田青邨等二十一人の岐阜県出身者が紹介されているが、その中の一人に、三好學<sup>(4)</sup>がいる。三好學は恵那郡岩村町出身。わが国の近代植物学を開拓、確立し、またわが国の天然記念物の指定、保存にも力を尽くした学者である。

その三好學は、十七歳だった明治十二年三月頃から同十四年十二月まで、土岐郡土岐小学校（現・瑞浪市立土岐小学校）の訓導兼校長を務めた。この三年近くの土岐小勤務のうち、三好は、自分が最初に担任した下等小学校第三級生を、第二級、第一級、上等小学第八（第二）、第一級と持ち上がったが、その学級を中心に、日々の授業内容等について、全体で二四六〇ページに及ぶ克明な記録を『教育授業日誌』（以下『授業日誌』と略す）として残している。日付の順を追ってその都度まとめてあった第一号から第三十一号までの一年半分の記録を、最後に上下二冊に編纂するに当たり、三好は『授業日誌上』の冒頭に「緒言」を付し、この記録について次のように述べている。



生活実態として見られる内容ではない。さらに、その「忠告」する理由について見ても、例文の「甚々悪シキ事」や「方今文化日新隆盛ノ世ニ至テ所々ニ學ノ設ケ在サルハナシ」のほか、「書ニモ飽食ト大酒ハ怠惰ノ元ト有之又日夜大酒スル時ハ身體勞レ終ニハ一命ヲ失フモ計リ難シ」「今哉皇化ノ浹洽愈漬日ニ廣リ山間僻邑ノ地ト雖モ文化盛カンニ行ハレ將ニ俊秀群出セントス況哉府下在学トシオ力ヲ盡サスンハ何レノ時ヲカ期セン」「夫レ明治王政ヨリ各州ニ學校ヲ建築シ村ニ不學ノ戸ナク家ニ不學ノ徒ナカラシメントノ布告ヨリ何方ノ僻邑ト雖皆勉強セサルハ無シ然ルニ貴君ノ如キ留學シテ怠惰ナルハ恰モ光輝燦然タル玉ヲ捨テ石瓦ト同クスルニ均シ」など、大人の考え、言葉の使い方をしている、到底四、五年生程度のものではない。

この頃の生徒作文二種類が、現在の高山市立東小学校の記念館にも残されている。東小には、その前身であった煥章学校、高山尋常高等小学校時代からの教育資料がこの記念館に保管されているが、その中に明治十二年前後の生徒作文がある。一つは、「上等小學第七級生卒業大試験 十二年八月四日 作文題 舟遊ノ記」の表紙の付いた綴りである。その中の作品の一つ挙げると次のようである。

舟遊ノ記

暑氣燃ユルガ如シ茲ニ己卯八月十五日友人兩三輩ト舟ヲ近江ノ琵琶湖ニ浮ブ時已ニ脯三井ノ晚鐘鳴リ夕光瀨田ヲ照シ衆雁堅田ニ落宿ス清風徐々波ヲ吹テ舟中ヲ洗エバ心中之ガ爲メニ清ミ身體之ガ爲ニ清潔トナル已ニ

シテ玉兔伊吹ノ樹陰ニ出テ皓々ト湖中ヲ照ラス此夜ヤ晴天一点ノ雲ナク水森々トシテ月光ヲ受ケ化シテ鏡ヲ浮漂スルガ如クトナル此ニ於テ啞ナガラ斯ノ如キ勝景ヲ覽見シ此ニ於テ宴ヲ催シ海水ヲ以テ盃ヲ洗ヒ互ニ飲シ詩歌ヲ詠ジ心ヲ樂マシム已ニシテ三更ト告グル者アリ此ニ於テ転ジテ家ニ歸ル

上等第七級 中井常之助

これは前掲の書簡文とは違い「紀事（記事）文」と言われるもので、当時の作文書にも、「紀事類」（「紀事文題」）、「記事文」（「新撰実用作文」）、「記」（「小學文題新編」）というような部立てをして、文題、文例を載せている。新橋鐵道局ノ記、道灌山觀杜鵑花ノ記、關原古戰場ノ記など、事実の経過を書きしるした文である。「琵琶湖ニ遊ブ記」「琵琶湖水ノ記」「夏日舟行ノ記」「月夜舟遊ノ記」などの内容が作文書にあつて、その応用として「舟遊ノ記」が試験問題として出されたのであろうか。

しかし、この作文を書いた上等小學第七級生は、現在の学年に比定すると五年生になる。作文教科書の例文をそのまま模倣して書く場合はともかく、試験に臨んで、いわゆる教場即題の形で書くとなると、部分部分において、適当に覚えた語句を使ったり、繋ぎ合わせたりすることはできても、首尾一貫という観点から、無理が生じてくるのは当然であろう。次の一文（部分）はその一例である。

暑氣赫々一日涼遊ヲ成サント欲シ雨風ニ逢フテ果サズ明日ヲ待テ遊ブヲ約ス幸ヒ天氣晴和恰モ愴海上ノ如ク

小学校の作文指導は、どのように行われていたのであろうか。その実情を窺い知る一つとして、「小學教則改正」の文部省布達から三年余りを経過した明治九年九月十四日に書かれた生徒作文が、元飛騨郡代高山陣屋文書として岐阜県歴史資料館に保存されている。和紙に筆で書かれた「友人ノ怠惰ヲ忠告スル文」という題名の、下等小学校生徒十四名の作文を仮綴じした文書である。

この作文には、題名、学級、氏名、本文の他に、書き手の年齢が付されている。どういういきさつでこれが高山陣屋文書として残ってきたのか、それを推測させるものが『高山市史』の記述の中に見られる。それによると、明治九年九月八日、当時の岐阜県権令小崎利準は、その前月筑摩県から岐阜県管轄に入った飛騨三郡の初巡視のため、県官十四名を従え高山へ入った。十一日には新築中の煥章学校を視察、次いで十四日、小崎県権令は支庁一課の井手大属に命じて高山町内の学校生徒の学力試験を行わせた。その場所は各学校のほか法華寺、宗猷寺が建てられた、というのである。したがってこの作文綴りは、九月十四日という日付から考え、また当時の昇級、卒業試験課目に作文があったことから考え、この時小崎権令が行った試験の答案の一部ではないかと推測される。

第一級生と温習生半数ずつが入り交じった十四名のうち、最年長及び最年少の生徒の作文を挙げてみると次のようである。

#### 友人ノ怠惰ヲ忠告スル文

第一級生 細江川 米

愚謹テ言フ聞ク貴君得ラルベキ時ヲ得スシテ却テ遊蕩ニ耽ルト我師常ニ是ヲ戒メリ方今文化日新隆盛ノ世ニ至テ所々ニ學ノ設ケ在サルハナシ由テ今ヨリ謹テ勉強ヲ勵シ以テ諸彦ニ劣ラサルコト今日人タルモノ、義務ナラント疎愚ノ罪ヲ犯以テ一言ヲ呈ス請フ其失敬ヲ咎ムルナク勉勵セハ余モ亦幸甚 十五年一ヶ月

#### 友人ノ怠惰ヲ忠告スル文

第一級生 田中貢太郎

寸楮拝呈旦夕冷氣相催候處貴君益御清適奏欣賀候陳レバ近日友人ヨリ貴君家業ヲ勉メス只酒宴ヲ事ト被成候ト承リ甚タ悪シキ事ニ候因テ酒ヲ止メ家業ヲ事トシ毫モ怠惰ヲ生ゼザランコトヲ願フ勿々頓首

九年十一月

同じ第一級生であるのに、生活年齢に大きな開きが見られるのは、学制頒布後四年という時代の反映であろうが、第八級から始めて、「毎級六ヶ月ノ習業」の第一級生を現在の小学校の学年に当てはめて考えると、四年生後半の児童たちに相当することになる。

その生徒たちが、これだけの漢字、漢語を使い、書簡文の形式、語句の用法に従った書き方をしているのである。また、内容を見ると、友人の「怠惰」ハ、例文のように「遊蕩ニ耽ル」「家業ヲ勉メス只酒宴ヲ事ト被成」の他「學術ニ怠リ遊蕩」「宴遊ニ耽リ無益ニ財ヲ費シ」「日夜酒宴ニ耽リ家業ヲ願ミス」など、およそ小学校四、五年生程度の

授」<sup>コトバノソラヨミ</sup>「單語誦誦」のような教科になっている。では、必要な事柄、思いなどを人に伝達していくための文章を書く「作文」の指導にかかわっては、どのような教科が考えられていたのだろうか。同教則では次のようになってい

下等小學

第三級 書牘 一週一時

啓蒙手習本窮理捷徑十二月帖ナトヲ用ヒ

簡略ナル日用文ヲ盤上ニ記シテ講解シ生

徒ヲシテ寫シ取ラシム

第二級 書牘 一週二時

前級ノ如シ

第一級 書牘 一週四時

日用文諸証文等ヲ授ク

上等小學

第八級 書牘作文 一週四時（注・第七、第六級同じ）

短簡ナル日用文ヲ作ラシム

第五級 書牘 一週二時（注・第四級同じ）

日誌類ヲ用キテ公用文ヲ教フルコト日用

文ノ法ノ如シ

第三級 書牘作文 一週二時（注・第二級同じ）

公用文ヲ作ラシム

（注・第一級では、教科としての作文はなし）

このように教科名は「作文」ではなく、手紙、書簡の意味を表す「書牘」または「書牘作文」となっていた。そし

てまた、教科内容の説明に、「諸証文」「公用文」もあるが、手紙の文章の意味で使われることが多い「日用文」がまず挙げられていることなどから、この頃の小学校の「作文」では、下等・上等を通して、特に書簡文章を書くことが重視されていたことが分かる。

こうした力を付けるための「作文」の授業時間数を見ると、同教則に学校の総授業時数の規定が「一日五時一週即四日間二十時ノ課程」とある中で、下等第一級生から上等第八・七・六級生（現在の小学校の中学年から高学年にかけて）は、毎日一時間の「書牘」または「書牘作文」の授業を行うように示されている。

年代が下っても、「簡短ノ假名交リ文ヲ作ラシメ兼テ口上書類ヨリ日用書類ニ及ブベシ」（明治十九年「小學校教則綱領」）「作文ハ假名文、近易ナル漢字交リ文、日用書類等ヲ授クベシ」「作文ハ……處世ニ必須ナル事項ヲ記述セシメ」（明治二十四年「小學校教則大綱」）など、作文の内容については、処世のために必要な日用書類特に書簡文を書く力を付けることが重視され続けたということが出来る。よく、学力を評価して「手紙一本満足に書けない」というようなことが言われたが、それほど学制頒布以後の小学校作文教育における日用文重視の考え方は根強いものがあつたということが出来る。

岐阜県高山町の生徒作文

このような学校制度、教育内容の中で、岐阜県における

# 明治十年頃の岐阜県における 小学校作文教育の一実態

高 橋 弘

## A Study of Elementary School Composition Instruction in Gifu Prefecture in the 1870's

Hiromu Takahashi

### はじめに

明治期以降の、我が国小学校における作文・綴方教育<sup>(1)</sup>の歴史について書かれた著作を披見すると、その時期時期を特徴づける児童の作文・綴方や、教師の主張・指導実践記録といった学校現場の資料が相当数収録され、それらをもとに、論が展開されている。しかし、それら資料の中に、岐阜県関係の資料が引用されているのを見出すことはなかなかむずかしく、特に時代を遡るほどその資料は皆無とっていい状況にある。

岐阜県では、川口半平によって『作文教育変遷史』が書かれ、その中で、岐阜県における作文・綴方教育の動向について述べられているが、やはり、明治期について見ると岐阜県関係の資料は皆無である。

明治期の作文教育については、どの作文・綴方教育史を見ても、形式主義、実用主義、範文模倣の画一主義の指導が行われた時代という規定がされている。岐阜県における作文教育も、恐らくはそういう規定の域を出なかったであろうと予測するものの、他府県の資料ではなく、岐阜県の児童の作文・綴方、岐阜県の教師の指導実践記録等、岐阜県の実態資料をもとに、そのことを明かにしてみたいというのが本稿の立場である。

### 「小學校教則改正」に見る作文

明治五年、「邑に不學の戸なく家に不學の人なからしめん事を期す」<sup>(2)</sup>（學事奨励に關する被仰出書）として「學制」が公布され、ここに近代日本の教育が始まった。

同時に出された文部省布達の「小學校教則」及び明治六年の「小學校教則改正」によれば、当初の學校制度は、「小學ヲ分テ上下二等トス下等ハ六歳ヨリ九歳ニ止リ上等ハ十歳ヨリ十三歳ニ終リ上下合セテ在學八年トス」となっており、下等、上等それぞれについては、「下等小學ノ課程ヲ分テ八級トス毎級六ヶ月ノ習業ト定メ初テ學ニ入ル者ヲ第八級トシ次第第二進テ第一級ニ至ル」、「上等小學亦八級二分ツ毎級課程各六ヶ月トス亦第八級ニ起テ第一級ニ終ル」として

いる。

この各級毎にどのような教科の授業が行われたか、「小學校教則改正」で例えば小学校入学当初の第八級を見ると、<sup>カナツカヒ</sup>「綴字」<sup>テヲラヒ</sup>「習字」<sup>コトバノヨミミカタ</sup>「單語讀方」<sup>サンゴウ</sup>「算術」<sup>ゼウギノサトシ</sup>「脩身口授」<sup>キョウシキ</sup>「國體學口